

爬 虫 類

概 説

日本における爬虫類は、現在のところ亜種を含めてカメ目4科14種、トカゲ目10科70種、本州ではカメ目4科10種、トカゲ目6科16種が知られている。本県では、カメ目4科8種、トカゲ目6科13種が知られている。本州産爬虫類のほとんどが福井県に生息しており、確認されていない種は、京都府および滋賀県に生息するミナミイシガメと、四国・瀬戸内海周辺に生息するタワヤモリ、日本海に少ないヒメウミガメ、回遊するウミヘビのエラブウミヘビ、マダラウミヘビの5種だけである。

爬虫類の過去の調査記録は、各市町村史で部分的に調査されたものしかない。しかし、両生類同様、福井県内を網羅した第一次、第二次の「福井県みどりのデータバンク」調査は、生息域の縮小・拡大等の変遷を調査したものであり、ある程度精度の高いものである。

その結果、県域絶滅危惧Ⅰ類は1種、県域絶滅危惧Ⅱ類は3種、要注目4種を選定した。福井県のウミガメ類では、対馬暖流に乗って回遊し、冬季に低温で行動が鈍り、岸に漂着して死ぬものや定置網にかかる個体が多い。

アオウミガメは、4例の成体が確認されているが、春から夏に回遊してくる傾向が見られる。タイマイは、10例確認されているが、甲長30cm前後の幼体が多く、秋から冬にかけて、死後漂着する例が多い。オサガメは、採集確認記録が13例報告されているが、秋から冬に回遊が見られる。冬に死後漂着する例もある。アカウミガメは、唯一日本の本土で産卵するウミガメであり、西南日本は世界的にも重要な産卵地の一つである。県内では11例の成体等が確認されている。石川県では3例の産卵記録があり、1例が孵化し日本海側の産卵北限として記録がある。福井県では、1967年に小浜海岸での産卵記録が残っているが、詳細は不明である（徳本洋, 1984）。ヒメウミガメも回遊して来ていると考えられるが、確認記録はない。しかし、ウミガメそのものが世界的に絶滅傾向にあることから、タイマイを県域絶滅危惧Ⅰ類、アオウミガメ、アカウミガメ、オサガメを県域絶滅危惧Ⅱ類と選定した。ウミガメ類側から見ると、近年の福井県内の海岸は、消波ブロックや護岸堤構築、砂浜への人や車の乗り入れ等の上陸阻害要因により、ウミガメが上陸して産卵できる砂地が激減している危機的な状況となっている。

陸水生のカメ類では、クサガメが、第一次「福井県みどりのデータバンク」調査の日野川下流域の4地点から、10年後の第二次「福井県みどりのデータバンク」調査で、日野川下流域から浅水川中流域まで生息域が拡大してきていることが判明した。また、アメリカ南部が原産地のミシシッピアカミミガメがペットショップでミドリガメとして大量に販売され、飼育に飽きて放棄された個体が野生化し、日野川下流域や九頭竜川下流域から北潟湖、日野川中流域、浅水川中流域まで分布を広げている。

逆に、県内の河川の中・上流域や山麓帯の用水池、池・沼に普通に見られた里山の象徴であったイシガメは、その生息域が狭められている。スッポンは、県内の河川の中流域に生息し、時折、甲長40cm級の個体が九頭竜川や日野川中流域で捕獲されている。しかし、河川の護岸工事、河川堤内地の公園化による自然堤防河川の減少が進み、スッポンの確認生息地点や個体捕獲記録が急激に減少している。このことから県域要注目種と選定した。

トカゲ目のヤモリは、県内平野部の市街地の民家が生息場所であり、今庄町、美山町に生息域が拡大してきている。トカゲとカナヘビは、県内一円に、やや乾燥した平地の山麓帯から低山地に広く分布している。トカゲは、やや減少傾向にあるが日当たりの良い場所に、カナヘビは、草地に普通に見られる。

陸生ヘビ類では、もともと生態系の上位に位置し、個体数が少ない。平野部から低山地にアオダイショウ、シマヘビが、山地にヤマカガシ、ジムグリ、マムシが県内一円に分布し、比較的普通に見られる。タカチホヘビは、県内一円に分布し、海拔3mの大飯町長井地区から低山地まで、県内局所的にやや乾燥ぎみの所で生息が確認されている。また、地中に生息しミミズを捕食し、生息環境を強く選択するらしく、亜熱帯性植物が生い茂る小浜市の蒼島でも確認されている。トカゲや小型のヘビ等の爬虫類を捕食するシロマダラは、夜行性で確認されることは少なく、県内一円で生息していたが、第二次「福井県みどりのデータバンク」調査では、平野部の河川堤防や山麓帯では見られず、土壌生物採集の折、時たま確認される山地に限られてきている。ヒバカリは、平地から山地の森林、水田、河川のアシ原等、幅広い環境に生息するが、カエル、オタマジャクシ、小魚やミミズを捕食するため、河川や水辺の環境変化の影響を強く受ける。生息確認地及び確認個体数の経年変化から、タカチホヘビ、シロマダラ、ヒバカリを要注目と選定している。

ウミヘビ類は、最も海洋生活に適応し、外洋性となっているセグロウミヘビや、琉球列島や台湾に生息しているクロガシラウミヘビもしばしば定置網にかかって捕獲される。ウミヘビは全て有毒なので、漁師には恐れられている。

(長谷川 巖)

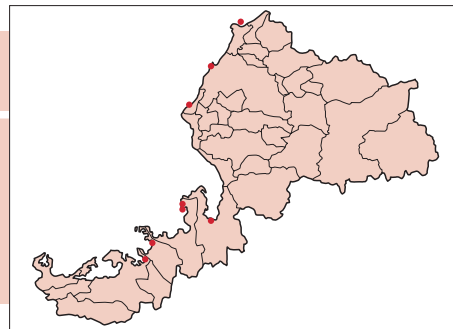
タイマイ

カメ目ウミガメ科

Eretmochelys imbricata (Linné)

福井県カテゴリー 県域絶滅危惧Ⅰ類

環境省カテゴリー 絶滅危惧ⅠB類



●種の特性

ウミガメ類の中で最も美しい黒褐色の雲上模様がある鱗板を持つ。甲羅の形はハート形で、甲長は最大でも90cm以下。県下に漂着、捕獲されるものは30～40cm以下の幼体が多く、鱗板は瓦状に重なっているのが特徴。鋭い鉤状の口で、主に海綿類、エビ、カニ類、ウニ類等の無脊椎動物を補食する。

●生息状況

太平洋、大西洋、インド洋等の熱帯、亜熱帯のサンゴ礁や岩場に広く棲息、分布する。

幼体の時期には暖流に乗って回遊し、県下の沿岸には晩秋から冬に漂着して捕獲され、現在10例近くの出現記録がある。

主な産卵場はフィリピンやソロモン諸島等で、我が国では沖縄以南のごく限られた海域と推定されている。

●存続を脅かす要因

美しい鱗板をべっ甲として、装飾加工品の好材料にされ、需要が多い。そのため乱獲によって世界中に減少している。

●参考文献

西村三郎・安田徹．1967．日本海におけるタイマイの出現記録．京大瀬戸臨海実験所研究報告．15(4)．297-302 (英文)．

安田 徹．1968．福井県敦賀半島で捕獲されたタイマイ．採集と飼育．30(1)：8-9．

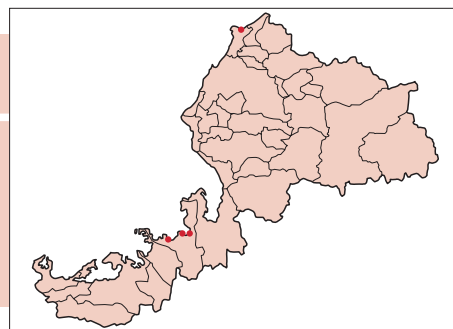
アオウミガメ

カメ目ウミガメ科

Caretta mydas (Linné)

福井県カテゴリー 県域絶滅危惧Ⅱ類

環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類



●種の特性

大型になるウミガメで、甲羅は褐色の混ざった濃い緑またはオリーブ色であるが、30cm以下の幼体では赤褐色で放射状の模様があるため、タイマイと紛らわしくなることがある。鱗板は中央に5枚、左右に4枚で、アカウミガメと本種では頭部の前額鱗板が2枚（1対）に対し、タイマイでは4枚（2対）で吻が鉤状なのでそれぞれ区別できる。甲羅の形は短い楕円形。最大125cm、体重250kgに達する。

植物食性で、波静かな内湾や入り江の砂泥底に繁茂するアマモやヒルモ等の海産顕花植物を主食としている。

●生息状況

熱帯、亜熱帯の前記した沿岸に広く棲息、分布するが、長距離回遊の能力がある種で、我が国近海にもしばしば来遊する。

県下では甲長50cmから100cmまでの個体が記録されている。

主な産卵場所はインドネシアやハワイ諸島であるが、我が国では小笠原諸島となっている。

●存続を脅かす要因

卵は現地で食用にされ、肉はウミガメスープの好材料とされているため、近年世界的に産卵上陸の頭数は減少傾向にある。特に産卵場の消失は存続の脅威となる。

●参考文献

西村三郎．1968．日本のウミガメ．Nature study．14(6)：2-7．

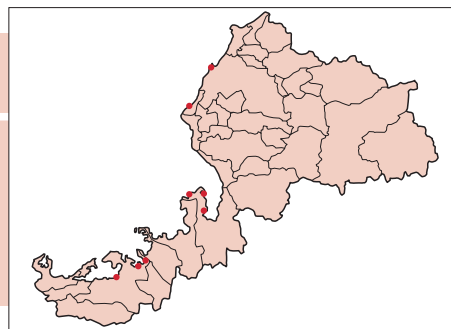
アカウミガメ

カメ目ウミガメ科

Caretta caretta (Linné)

福井県カテゴリー 県域絶滅危惧Ⅱ類

環境省カテゴリー 絶滅危惧Ⅱ類



●種の特性

大型になるウミガメで、赤褐色の鱗板は中央にある5枚の左右に5枚敷石状に並ぶのが特徴。甲羅はハート形に近い。最大甲長は135cm、体重400kg位になる。30cm以下の幼体では、3本の隆起線が見られるが成長と共に消失する。

肉食性で、魚類、エビ、カニ類、貝類等を補食する。

●生息状況

世界の亜熱帯、温帯海域に棲息、分布するが、主に我が国本州中部以南の海域に棲息して産卵する唯一の温帯性種とするのが正しい。

日本海側では石川県まで産卵が確認されており、県下でも敦賀半島や小浜の内海半島で産卵があったとされている。また、20cm以下の幼体も確認されているが、県下の砂浜地帯で孵化した可能性が高い。現在まで本種は成体と幼体合わせて10例以上の出現記録がある。

●存続を脅かす要因

砂浜海岸の護岸工事により、産卵の際に上陸を妨げられたり、産卵場の縮小等が考えられる。また、卵が破壊されたり、盗難に遭うこともある。

最近では、稚ガメがペット用に捕獲される可能性もある。本種は明らかに減少傾向にある種なので、県の関係機関と連絡を密にして保護対策を進めていく必要がある。

●参考文献

西村三郎．1968．日本のウミガメ．Nature Study 14(6)：2-7．

徳本洋．1984．石川県におけるアカウミガメの産卵3例．両生爬虫類研究会誌．30．1-9．

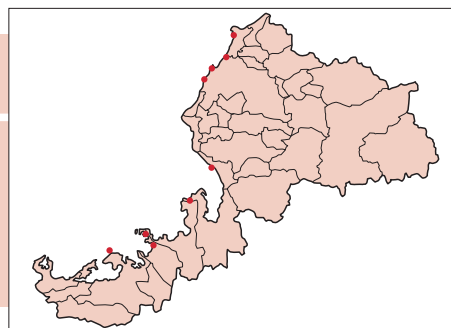
オサガメ

カメ目ウミガメ科

Dermochelys coriacea (Linné)

福井県カテゴリー 県域絶滅危惧Ⅱ類

環境省カテゴリー —



●種の特性

現存するカメ類の中で最大となる種で、甲羅の構造は他のウミガメ類と異なり、小骨片が多数集まって一枚の薄い板状となっている。この表面に縦に走る7条の隆起線がある。色は暗褐色か濃いブルー、時に黒色となる。甲羅の形は長いハート形に近い。最大甲長200cm、体重500kgに達する。

産卵期以外は外洋で漂泳生活をしている。魚類、大型プランクトン（クラゲ類やサルパ類）を補食するが、流れ藻となった海藻類も餌として利用する。

●生息状況

太平洋、大西洋、インド洋の暖海外洋の海域に広く生息、分布するが、我が国では北海道の北部にも出現したことがある。

県下でも10例以上の記録があり、甲長は100cm以上のものが多い。

主な産卵場はマレー半島やセイロン島であるが、南米のエクアドルからパナマ地方にも小規模な産卵場が知られている。

●存続を脅かす要因

本種の産卵場における上陸頭数は、激減していることが確認されている。その要因の一つに海洋汚染がある。漂着した死亡個体の胃や腸から100枚以上のビニール袋が発見された事例が後を絶たない。プラスチック製品等の海洋投棄が存続の脅威となる。

●参考文献

西村三郎．1968．日本のウミガメ．Nature Study．14(6)：2-7．

松村初男．1996．ウミガメ類．石川県の両生、爬虫類．61-72．石川県．

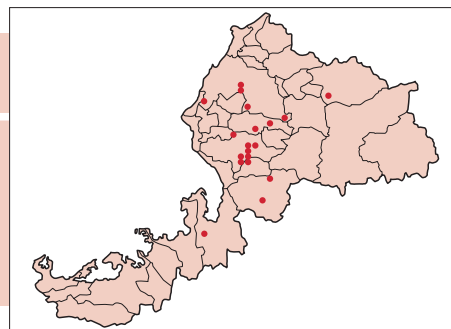
スッポン

カメ目スッポン科

Pelodiscus sinensis (Wiegmann)

福井県カテゴリー 要注目

環境省カテゴリー 情報不足



●種の特性

背甲長は20～30cm程度。甲は非常に扁平で鱗板がなく、柔らかい皮膚で被われている。四肢の水かきや爪が発達、鼻孔は先端が強く突きだし肉質の口唇を持つのが特徴。背面は緑味を帯びた灰褐色で暗色の不規則な斑紋が点在する。腹面は白色からピンク色。

雄の尾は雌に比べて長く太い。冬眠は5～6カ月にもおよび、繁殖期は初夏で、産卵は年に3～5回、一度に10～40個産卵する。2～3カ月で孵化し1週間ほどで水中生活に入り、夜活動する。

●生息状況

県内の河川の流れの緩やかな中・下流域の砂泥質底や池沼に生息する。

肉食性で魚類、甲殻類、貝類、昆虫類、小型の両生類、爬虫類を補食。幼体は鳥類等に補食される。

●存続を脅かす要因

護岸工事や河川敷の公園化等に伴う砂地や草地の産卵に適した陸環境の改変が主な要因である。その他に水質汚濁、農薬や科学肥料の大量の使用が存続に悪影響を及ぼしている。

●参考文献

安川雄一郎．1996．スッポン．日本動物大百科．第5巻両生類・爬虫類・軟骨魚類．63pp．平凡社．
福井県．1998．福井県の両生類・爬虫類・陸産貝類目録．141pp．福井県．

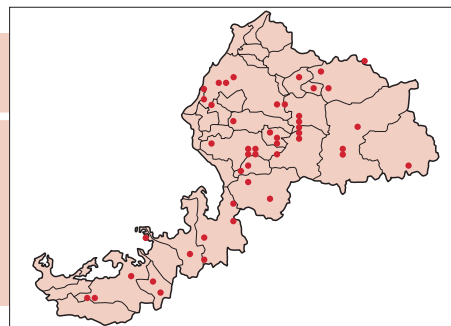
ヒバカリ

トカゲ目ヘビ科

Natrix vibakari (Boie)

福井県カテゴリー 要注目

環境省カテゴリー —



●種の特性

全長40～60cmの小型で地味なヘビ。背面は淡褐色から茶褐色で頸部に黄色い斑紋がある。腹面は薄クリーム色で、腹板の端には小黑斑が並ぶ。

水辺や多湿な環境を好むため、食性はカエル、オタマジャクシ、小魚、ミミズであり、おとなしいヘビで無毒。地上性。

●生息状況

本州、四国、九州、佐渡、隠岐、奄岐、五島、屋久等に分布。県内では低山地の森林に生息し、山地とそれに続く田園地帯や小河川に多い。

●存続を脅かす要因

里山周辺の圃場、農業用水路整備や道路建設等により生息地が直接的に改変されることが主な要因。餌となる水辺の小動物が減少しているのも一因である。

●参考文献

千石正一．1979．原色一両生爬虫類，206pp．家の光協会．
福井県．1998．福井県の両生類・爬虫類・陸産貝類目録．141pp．福井県．

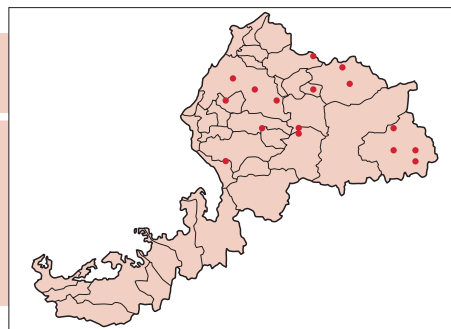
シロマダラ

トカゲ目ヘビ科

Dinodon orientalis (Hilgendorf)

福井県カテゴリー 要注目

環境省カテゴリー —



●種の特性

日本固有種で全長30～70cmの小型で細身なヘビ。背面が淡灰色の地に、黒い横紋が胴部に40個、尾部に20個ほどあり、一見マムシやアオダイショウの幼ヘビと見間違える。夜行性。

主に爬虫類食で、幼蛇は白黒明暗が明瞭。気性は荒いが無毒のヘビ。

●生息状況

本州、四国、九州、佐渡、壱岐、屋久島、伊豆大島等に分布。

県内でも里の堆肥や薪の集積場、家屋の基礎石等で発見されていたが、里では激減し、山麓帯から海拔800m級以下の山中でしか確認できなくなった。

●存続を脅かす要因

宅地開発、護岸工事、道路建設など土地の改変による生息場所の減少と餌となる小動物の減少が主な要因である。

●参考文献

福井県。1998。福井県の両生類・爬虫類・陸産貝類目録。141pp。福井県。

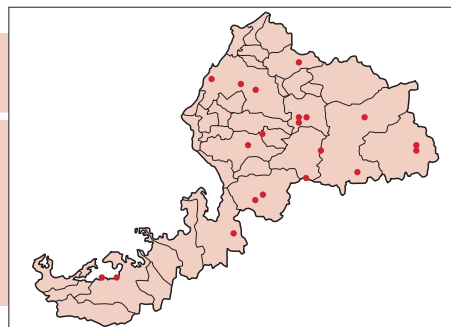
タカチホヘビ

トカゲ目ヘビ科

Achalinus spinalis (Peter)

福井県カテゴリー 要注目

環境省カテゴリー —



●種の特性

最大の個体でも50cm以下の細身のヘビ。全身が真珠光沢のある紫がかった黄褐色で、背中線上を細い黒色縦条が頸部から尾端まで走り、腹面は黄色で無斑。尾下板は一行が種の特徴。無毒ヘビ。

夜行性で半地中性であるため、人目に触れる機会が少ない。ミミズ等を捕食し落葉や地中に潜る。乾燥に弱い。

●生息状況

本州から四国、九州、中国東南部にまで分布。県内では過去に平野部から山地まで確認されていたが、今では平野部ではほとんど確認されていない。

生息環境を強く選択するヘビらしく、足羽山と小浜の蒼島など乾燥ぎみな所で局所的に生息が確認されている。

●存続を脅かす要因

圃場整備、道路整備等による生息環境の改変が主な要因である。

●参考文献

松井孝爾。1985。日本の両生類・爬虫類。158pp。小学館。

福井県。1998。福井県の両生類・爬虫類・陸産貝類目録。141pp。福井県。